

6. 調査研究報告

企画展開催に向けて

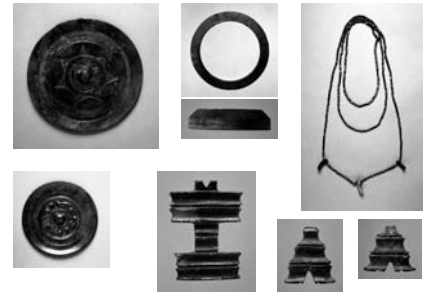
第50回企画展『チョット変だよ！ 富士市の古墳』

志村 博

I はじめに

富士市における遺跡の発掘調査は、昭和32年に県立吉原工業高等学校の新設に先立って行われた、比奈の東坂古墳と大坂上古墳の発掘調査がはじめてでした。それ以前は、工事や耕作の途中に偶然発見され、発掘調査が行われる場合がほとんどで、現在のように工事に先立って行われることはありませんでした。

これらの二つの古墳のうち、東坂古墳は全長60mもの新規発見の前方後円墳でした。副葬品も内行花文鏡や四獣鏡のほか、琴柱型石製品・石釧などの石製模造品、勾玉・切子玉・管玉・白玉の他1000点を超す小玉など、極めて貴重な資料が発見されました。これらの資料から、古墳の築造年代は5世紀前半頃と考えられ、当時この地方を治めていた人の墓であると推定されました。このような貴重な古墳の発見により、遺跡への関心が高まってきました。



工事中に発見された東坂古墳の遺物

その後、昭和30年代後半から40年代になると、東海道新幹線及び東名高速道路建設など、公共工事に伴う発掘調査が増加してきました。富士市でも船津・須津・富士岡等の愛鷹山南麓にある遺跡をはじめ、伝法の東平遺跡や岩淵の山王遺跡群など、計画路線にある数箇所の遺跡の発掘調査が始まりました。

さらに昭和50年代になると、民間企業も埋蔵文化財への認識が高まり、発掘調査が急増し各市町村にも専門職員を置くようになりました。昭和52年には西富士道路建設を機に、行政としての本格的な発掘調査が始まり今日に至りました。その結果、今まで土に埋もれていた富士市の原始・古代の姿が徐々に明らかになってきました。

現在ある富士市内の遺跡の数は、土器片など遺物の散布地や集落等で170箇所以上、古墳に至っては800基を超えていると考えられています。このうち、集落等の遺跡では旧石器時代の古木戸B遺跡、縄文時代の天間沢・破魔射場・山王遺跡、弥生時代の中野遺跡、古墳時代の三新田遺跡、奈良・平安時代の東平・破魔射場・浅間林遺跡などの集落跡から多くの土器や石器のほか、住居跡や墓地などが発見されました。また、古墳等の遺跡では5世紀前半に造られた前方後円墳の東坂古墳をはじめ、6世紀中～後半頃の中原第4号墳、6世紀後半頃の寺の上古墳・谷津原第1号墳・横沢古墳、室野坂古墳群、7世紀代の花川戸第1・2・3号墳・大淵片倉第1号墳、8世紀頃の中原第1・2号墳・妙見古墳群などが調査され、前述した鏡や琴柱型石製品・石釧、環頭や象嵌などの装飾太刀や武器、壺鐙や轡などの馬具、勾玉や管玉・切子玉などの装身具等など貴重な資料を得ることができました。

このような貴重な資料や遺構から、様々なことが明らかになりました。特に古墳の中に不思議な内部構造を持ち、その古墳が他地域に無いことがわかってきました。このため、第50回企画展では『チョット変だよ！ 富士市の古墳』という展示会を開催いたします。

II チョット変な古墳の発見

ここでいう変な古墳とは、富士市大淵片倉第1号墳のことで、昭和50年の確認調査によって発見された7世紀中頃の古墳です。遺体を納める石室が普通の横穴式石室と異なる特異な構造をしていることがわかりました。

その後、これまで調査した富士市周辺の古墳の石室構造を確認したところ、県内では富士・沼津域を中心に集中的に分布しており『半竪穴式室』・『竪穴的石室』あるいは『段構造を持つ石室』と呼ばれている石室であることもわかってきました。

1 大淵片倉第1号墳

この特異な石室の規模は内側で全長4.5m・幅1.3m・高さ1.7mを測る長方形をしています。その構造は、無袖型の横穴式石室の形態を持ち、従来の羨道部に石室幅で垂直に石を組み上げています。

あたかも、奥壁に対して前壁とも言える壁状の構造物ですが、奥壁のように天井石とは接続していません。したがって、この壁状構造物の上面と天井石との間には空間が造られ、この空間から埋葬が行われていたと考えます。このため、この壁状構造物上面の平坦部は羨道部的な意味を持ち、ここに何らかの形をもって封鎖石が置かれるものと思われる。つまり、この壁状構造物は石室に入るための段階的な役目を持っていたものと考えます。

このような石室の構造は、竪穴式でもなく横穴式でもない石室ということから『半竪穴式石室』あるいは『竪穴的石室』と呼ばれています。

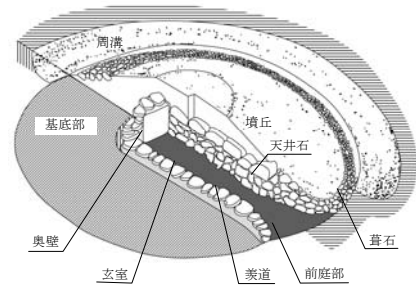
その後の検討や調査によって、このようなチョット変な古墳がいくつか見つかり、その特異な構造が全国的にも注目される古墳だったことがわかってきました。次に、このような古墳をいくつか紹介しましょう。



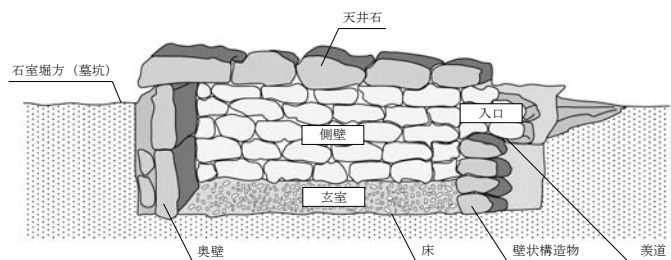
大淵片倉第1号墳



入口部の壁状構造物(石室内より)



普通の横穴式石室



特異な石室構造の略図

2 実円寺西第1号墳

この古墳は、富士市三ツ沢の富士東高等学校の西側にある実円寺西第1号墳です。昭和60年に古墳の保存修理のために発掘調査がおこなわれ、その特異な構造が明らかになった古墳です。しかし、前述した大淵片倉第1号墳とは少し違った古墳でした。

墳丘は既に上部が流出し、石室天井石が露出しているものの、その大きさは直径19m程を測る円墳です。

石室は既に露出しているものの、石室内には入室可能という極めて良好な状態でした。規模は内側で全長約11.1m、幅約2.3m、高さ約2.3mを測り、市内では最も大きな石室で、床面は奥壁側から僅かに傾斜していました。しかし、入り口の壁状構造物は大淵片倉第1号墳とは少し違い、数個の石を組み上げているのではなく、奥壁と同様に大きな一枚石を立てています。その高さは現床面から約90cmを測り、上部は石室に入るための羨道部となっていました。また、この壁状構造物の南側には、この石を支えるように人頭大の石が石室幅で1m²程詰められていました。

なお、古墳の築造時期は石室規模、出土遺物などから6世紀後半頃と考えられています。



実円寺西第1号墳と入口部の壁状構造物

(石室内より)

3 かぐや姫古墳

この古墳は昭和33年に調査された古墳です。墳丘は既に上部が流出し、石室一部が露出しているものの、その大きさは10×15m程を測る円墳です。

石室は良い状態で残り、その規模は内側で全長9.3m、幅1.25～1.40m、高さ1.60～2.00mを測る細長い石室です。床面は奥壁側から僅かに傾斜しています。壁状構造物は石を石室幅で床面下からほぼ垂直に組み上げ、その高さは床面から1.40mを測り、最も高く積み上げている古墳です。この壁状構造物は封鎖石として理解していましたが、その報告の中で『石室入口羨部に熔岩の割石で築いた縦幅1.45m、高さ1.45mのふさぎ石があり、石室を塞いでいた。一中略一被葬者があった毎に、その都度ふさぎ石を組み上げていたかは明らかではないが…。』とし、封鎖の状況が従来の横穴式石室と異なり、垂直に組み上げられていた構造壁であることを示しています。さらに発掘調査を担当した中野国雄氏の助言で

は、『玄室床面の築造時敷石は、この封鎖石で仕切られ、封鎖石下には施されていなかった。また、この封鎖石は僅かに地山を掘り窪めて築成されていた。』としています。これらのことから、この封鎖石は古墳築造時の構築物と判断できます。

なお、本墳の築造は石室規模・出土遺物などから6世紀後半頃と考えられています。

4 横沢古墳

横沢古墳は西富士道路建設に伴い、昭和52年に発掘調査した古墳です。現状での墳丘は直径16m・高さ3.5mを測る円墳で、西側の一部を道路によって削り取られている以外は、築造時の姿を残しているといえます。

石室は、天井石の一部が崩れている以外は比較的良好な状態で残り、その規模は内側で全長8.3m、幅2.3m、推定される高さは2～2.5mを測ります。その構造は前述した大淵片倉第1号墳とは異なり、壁状構築物は認められないものの、石室床面を竪穴状に掘り込み、羨道部とは20cm程の階段状の段を造りだしています。また、石室の封鎖については従来の横穴式石室と同様に羨道部に人頭大の石を積み上げる方法をとっていました。

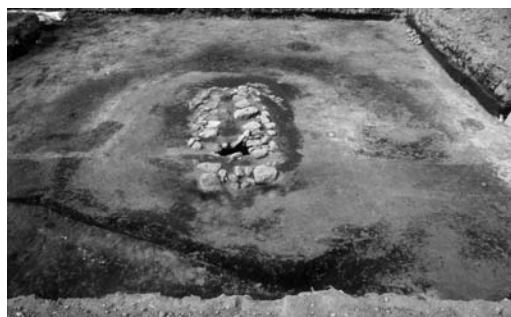
石室の掘り方は特異な竪穴状を呈し、長さ7.3m、幅4.2m、深さは奥壁側で45cm程を測ります。このような石室掘り方は、極めて珍しいものです。なお、本墳の築造年代は、その出土遺物から6世紀後半頃と考えられています。



横沢古墳と石室

5 中原第4号墳

この古墳は民間企業の開発に伴い、平成4年に行なわれた発掘調査で発見された古墳です。大きさは直形11mの円墳で、幅1.5m、深さ50cmの周溝が全周していました。



中原第4号墳と石室

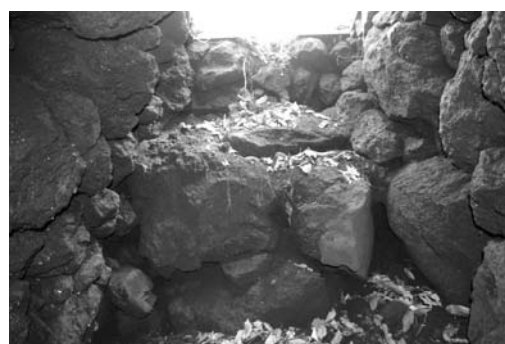
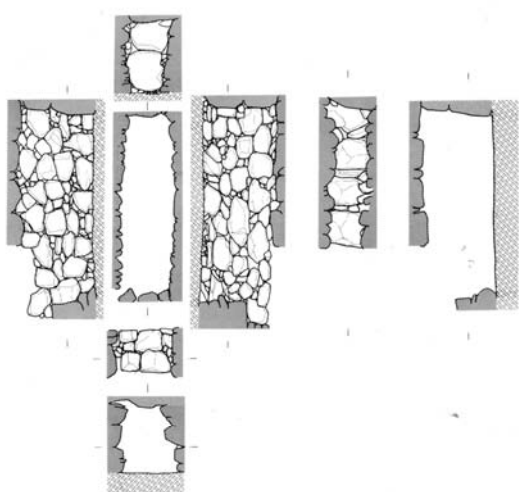
石室は無袖形の横穴式石室の形態を持つものの、天井石はすでに除去されていました。大きさは内側で長さ4.6m、幅

1.1m、残存高 1.0mを測りました。その構造は、石室掘り方（墓坑）を竪穴状に深く掘り窪め、石室の大半を土中に造り、石組みによる壁状構造物によって段構造を組み上げていきました。なお、本墳の築造年代は、出土遺物から6世紀中～後半頃と考えられていました。

以上、紹介した5基の古墳は、いずれも従来の横穴式石室とは違う、段構造という特異な構造で造られていましたが、その構造には少しずつ違いがありました。

- ・ 大淵片倉第1号墳は、壁状構造物を石室構築の時と同時に組み上げ、石室床面から90cm程に組み上げています。

これと同じ構造を持つ古墳は、沼津市の石川古墳群などがあげられます。

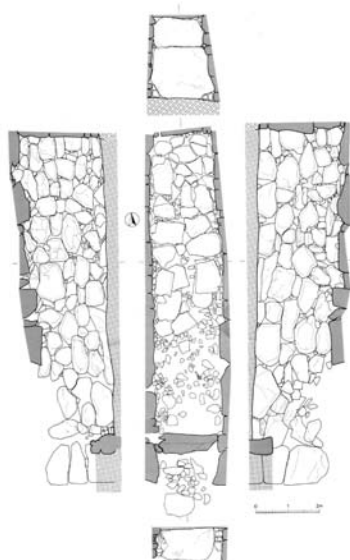


大淵片倉第1号墳の展開図と壁状構造物

(石室内より)

- ・ 実円寺西第1号墳は、この壁状構造物を石室幅と同じ巨石1枚を使って構築し、石室床面からの高さを、大淵片倉第1号墳と同じ90cm程にしています。

これと同じ構造を持つ古墳は現在確認されていません。

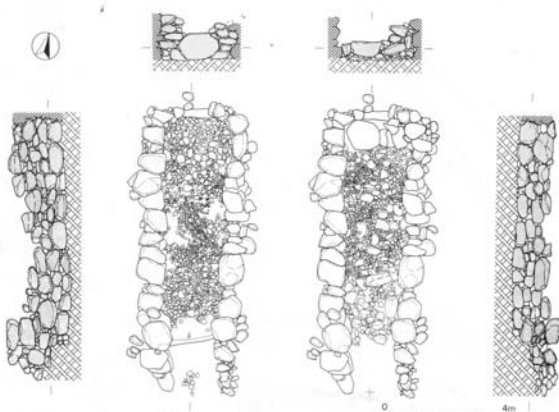


実円寺西第1号墳の展開図と壁状構造物

(石室内より)

- 横沢古墳の場合は、石組みによる壁状構造物を造らず、石室掘り方（墓坑）を竪穴状に、深さ 20cm 程に掘り窪め、意図的に段を造っています。

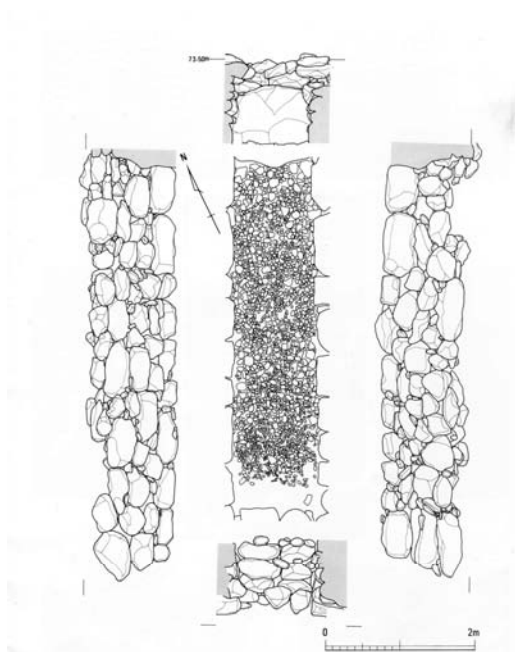
これと同じ構造を持つ古墳は、伝法の東平第 1 号墳古墳などがあげられます。



横沢古墳の展開図と竪穴状掘り方

- 中原第 4 号墳は、前述した横沢古墳とは逆に、石室掘り方（墓坑）を竪穴状に 1m ほど深く掘り窪め、石室の大半を土中に造り、石組みによる壁状構造物によって段構造を組み上げています。ただし、大淵片倉第 1 号墳と同類の可能性がありますが。

これと同じ構造を持つ古墳は、中原第 3 号墳などがあげられます。



中原第 4 号墳の展開図



壁状構造物(中原第4・3号墳)

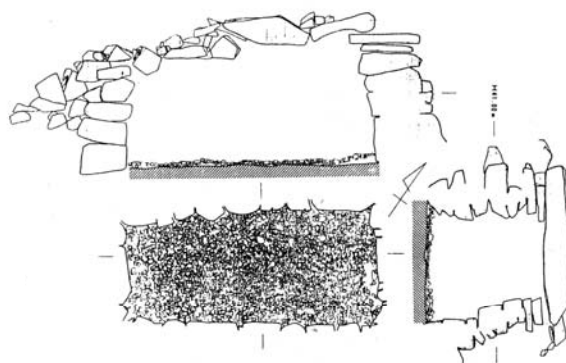
この様な石室は、現在富士市や沼津市を中心にした古墳群内に多く確認されていますが、県内の伊豆や中・西部では発見されていません。また、段構造を持たない通常の横穴式石室と混在して造られているようです。さらに、その分布を全国的に見てみると、他県でも同じような古墳があり、同じような分布をしているようです。

Ⅲ 他地域に見られるチョット変な古墳の様子

前述した古墳と同じようなチョット変な古墳は、近年の調査によれば九州から北関東辺りまで幾つか報告されているようです。特に鳥取県の大栄町にある上種東古墳群^{かみだねひがし}や愛媛県松山市の東山鷲が森古墳群^{ひがしやまとびもり}などが富士市の古墳とよく似ています。

1 東山鷲が森古墳群（1981・松山市教育委員会）

本古墳群の調査報告書によれば 8 基の古墳が確認されています。このうち第 2 号墳・第 4 号墳・第 6 号墳・第 8 号墳の 4 基が良い状態で残っていました。特に第 2 号墳は直径約 13m、高さ約 2.5～3.0m の円墳で、石室は横穴式石室で全長 2.3m、幅 0.85～1.05m、高さ 1.1m を測ります。石室の形については次のように書かれています。



東山鷲が森 第 2 号墳展開図

(『東山鷲が森古墳群』より転写)

『横穴式石室で、玄室入口相当部の両側壁のなかに、閉塞石が一部はさみ込む形になり、玄室入り口部に直接閉塞施設をなすもので、羨道部が殆どなくなり省略されているものである。また、閉塞石の乱れは追葬時が原因と考えられる。』

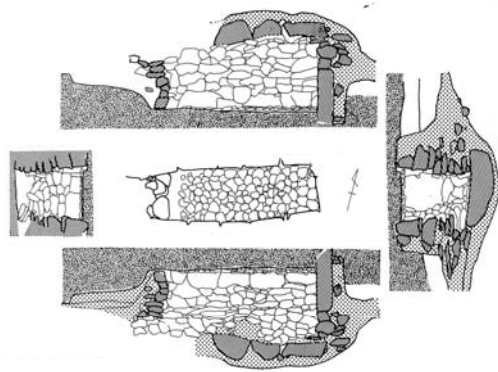
つまり、一番前の天井石と壁状構造物の上部を除く限り、石組みに安定が見られるが、石室入り口部と思われる封鎖石の部分は追葬時における乱れが見られるように感じます。石室の構造を見る限り、大淵片倉第 1 号墳の石室と大変よく似ています。

なお、本古墳群の築造年代は第 2 号墳が 7 世紀初頭、第 4・6 号墳は 7 世紀前半、第 8 号墳は 7 世紀前葉と報告されています。

2 上種東古墳群第 3 号墳（1976・鳥取県東伯郡大栄町教育委員会）

本墳は直径約 12m、高さ 2.7m を測る円墳で、いわゆる周溝は確認されていません。石室は横穴式石室で、その規模は内側で全長 3.55m、幅 1.15m、高さ 1.6m を測ります。石室の入り口と考えられる壁上構造物の石の積み上げは、その状況によって上下 2 段に分けられます。上部は積みかたが乱雑であるのに対し、下部は整然としていること、上部の各石

材の空間には単に土砂の流入が見られるのに対し、下部の空間には小石や粘土が詰めであるなどといった違いが認められました。そして、壁上構造物の上下の境は、そのまま墓道面へと連続し、一部に敷石が残っていました。このことから、追葬に関しては、壁上構造物の上部だけをはずして入ったものであり、下部は築造時の状況をよく残し、奥壁や両側壁と同様に壁体を構築していたものと考えられます。



上種東古墳群第3号墳

また、石室掘り方（墓坑）は竪穴状で全長5m・高さ3m、深さ0.7~0.8mを測ります。（『上種東古墳群第3号墳発掘調査報告書』より転写）

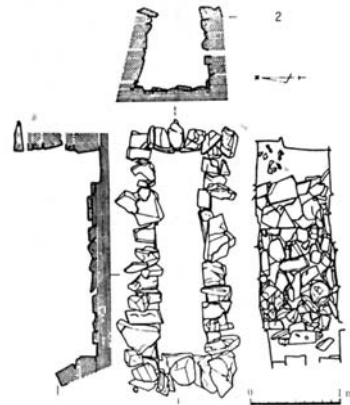
なお、本墳の築造年代は出土遺物から6世紀中葉と報告されています。

IV 企画展の見どころ

以上、紹介した7基のチョット変な古墳は、次のような共通点をもっています。

- 1 石室構造に僅かな違いがあるものの、石室入口部に階段状の段構造を持つという大きな共通点が認められた。
- 2 分布状況も静岡県同様、面的な広がりをもたず集中的に点在している。
- 3 同一古墳群の中で、通常の横穴式石室と段構造の古墳とが共存している割合が非常に多い。

このような、広範囲で共通性をもつ特異な石室はいつ・どこで築造されたのか、現在最も古い築造年代となると、北九州地方に多く見られる『竪穴系横口式石室』と呼ばれている石室があります。この竪穴系横口式石室は、従来の竪穴式石室の前壁上部付近に入口部を造り、追葬を可能にした石室で、北九州や朝鮮南部に多く分布しています。しかし、この竪穴系横口式石室と、これまで述べてきたチョット変な古墳とが、何らかの関係にあるという可能性を否定できませんが、現在の段階では二つの古墳を結び付ける資料的なものは発見されていません。



論山表井里A区3号墳

（城二第号墳より転写）

いずれにしても、古墳の場合様々な形があります。

この古墳の外観的な形の違いが、地域や集団・身分の違いを表していると考えられるなら、古墳の外観的な違いが無く、内部構造の違いというのが、集団内における被葬者の地域的・職業的、あるいは民族的な違いを表しているのではないのでしょうか。そうであるのなら、古墳の副葬品や造られる場所などに何らかの違いがでるのではないのでしょうか。

今回の企画展では、富士市に見られるチョット変な古墳は一体何なのか、いろいろな角度から調べてみるつもりです。

(富士市立博物館学芸員)

《参考文献》

加藤学園考古学研究所	『駿河伏見古墳群』	小野眞一・秋本真澄	1971
加藤学園考古学研究所	『石川古墳群 第三次発掘調査報告書』	小野眞一・秋本真澄	1976
鳥取県東伯郡大栄町 教育委員会	『上種東古墳群第3号墳発掘調査報告書』	土生田純之	1975
富士市教育委員会	「終末期古墳について」『中里大塚団地古墳』	植松章八	1976
宇土市教育委員会 城二号墳発掘調査団	『城二号墳』	三島 格	1981
松山市教育委員会	『東山鷲が森古墳群』	西尾幸則	1981
富士市教育委員会	「古墳の終末に於ける形態変化について」 『横沢古墳・中原第1号墳・伝法遺跡群、天間地区』	佐藤・志村	1981
富士市教育委員会	「発掘調査の概要」『実円寺西古墳保存修理工事報告書』	平林将信	1986
静岡県博物館協会	「後期古墳に於ける特異な石室構造について」 『研究紀要』11号	志村 博	1988
富士市教育委員会	『中原第3号墳・第4号墳発掘調査概要報告書』	前田勝己	1995
土生田純之 他	『東日本の無袖横穴式石室』	雄山閣	2010